

二つ拍子

成羽拍子

豊松盆踊り歌

大和拍子

てんがらこ

平成十一年七月 収集・発行

豊松村盆踊り実行委員会

# 二つ拍子

ハア ヨイサー コラサー ヨイサノセー

ヤレ 二つ拍子で お願いします

お庭の 繁盛じや よろしく頼む

ヤレ 何も この子は 知らないけれど

どうか 皆様 おつれと頼む

ヤレ ようこそ おいでて 下さいました

わしらに とりては 命の親よ

ヤレ 想うて 来たのに この戸が開かぬ

にくや この戸の かけ金が

ヤレ にくや この戸の かけ金よりも

かけた しゅうとの つらにくや

ヤレ 立てば しゃくやく 座れば牡丹

歩む 姿は ゆりの花

ヤレ 今よい この場で お盆の踊り

五穀 豊穰 夜の明けるまで

ヤレ わし(私)が やるのは あのチンヤ畑  
側が はらねば 芯立ちませぬ

ヤレ 娘 島田に チヨウチヨがとまる  
とまる はずだよ 花じやもの

ヤレ 一人 音頭じや お庭のじやまよ  
次なる 先生に よろしく頼む(お願いします)

ヤレ 一人 音頭は 互いにえらい  
次なる 先生に よろしく頼む(お願いします)

ヤレ 今の音頭さんの 声ほめます  
わしらは あのようによろやりません

ヤレ 次なる 先生が おいででござる  
次なる 先生に よろしく頼む(お願いします)

ヤレ どうやら この手も できたるような(いきつ  
きました)

次には 成羽に お願いします

# 成羽拍子

ハアー ヨイヤサノサー ヨイヤサノサー

ヤレ 成羽 拍子で お願いしましよ(お願いします)

エツコラセー(※録り返し)

どうか この調子で よろしく頼む

ハアー ヨイヤサノサー ヨイヤサノサー(※録り返し)

ヤレ かわいい がられて 寝た夜もごごる

泣いて 明かしたー 夜もごごる

(夢で 小便した 夜もごごる)

ヤレ 何を 申そうか お話しましようか

何も この子は 知らないけれど(知りたじやないが)

ヤレ 声は すれども 姿は見えぬ

高き 森木で 鳴く セミの声

ヤレ 今の 音頭さんの 声ほめます(良い声なごる)

わしらは あの様にや ようやりませぬ

ヤレ 今の 音頭さんにや 覚えがごごる

暑い 時代の ヨバイの 連れよ

ヤレ 踊るが バカなら 見るのもバカよ

同じ バカなら 踊ろうじやないか

ヤレ あなたよ 百まで わしや九十九まで  
共に 白髪の 生えるまで(生ゆるまで)

ヤレ 今年じや 豊年 穂に穂がさいて  
道の 小草にも 米がなる

ヤレ やぶれ ふんどし お寺ののれん  
時々 ぼんさんが 頭出す

ヤレ 仲の カモメに 潮時聞けば  
わたしや 立つ鳥 彼に聞け

ヤレ 山のカラスに 深酒をさせて  
主と 二人で 朝寝をしたい

ヤレ できたよ できたあーぞ よくできまする  
しばし この手で お願いします

# 大和拍子

ハー アリヤセー ヨウイヤナー

ヤレ 大和な 調子に(拍子に)切り替えます(お願いします)

「ソウリヤ」どうぞよ 皆様 合わせて頼む

ヤレ そうじやよ そうじやと(よ) 出きます

「ソウリヤ」この手を ゆるめず 夜の明けるまで

ヤレ 想うて かよえば 千里も(が)一里

「ソウリヤ」合わずによ 帰れば また千里

ヤレ 今年よ(は) 豊年 穂に穂が咲いた

「ソウリヤ」道のよ 小草にも 米がなる

ヤレ すいたな お方に 酒さす時は

「ソウリヤ」金によ 茶碗に なみなみと

ヤレ 目出たよ 目出たが 三つ重なりて

「ソウリヤ」末は 鶴亀 五葉の松

ヤレ 目出たよ 目出たが 三つ四つ五つ

「ソウリヤ」五つ 重なりや 五葉の松

ヤレ 酒はよ 飲め飲め 茶釜で沸かせ  
「ソウリヤ」お神酒 上がらぬ 神はない

ヤレ 音頭とる 子が 橋から落ちて  
「ソウリヤ」橋のよ 下から 音頭とる

ヤレ 鉦子よ 盃 くるくる廻る

「ソウリヤ」わたしやよ(わたしはよ) りきんで気が廻る

ヤレ 盆がよ 来たのに 踊らぬものは  
「ソウリヤ」猫か ネズミか お稻荷様か

ヤレ わたしや 豊松 五万石育ち

「ソウリヤ」お国 自慢の 盆踊り

ヤレ 未熟な 音頭で 失礼します

「ソウリヤ」お次の先生にお願いします(よろしく頼む)

ヤレ 及なる 先生が おいででなされた

「ソウリヤ」お次の先生によろしく頼む(お願いします)

ヤレ 今の 音頭さんの 声ほめます

「ソウリヤ」わしらじゃ あのようにや ようやりませぬ

ヤレ ようこそ 皆様 おいでなされた

「ソウリヤ」この手を ゆるめず 夜の明けるまで  
ヤレ 来いませ 見せませよ 豊松踊り  
「ソウリヤ」いずりや 踊らぬ 花ばかり

ヤレ 咲いた 咲いたよ 踊りの花が  
「ソウリヤ」里の 香りをとめて咲く

ヤレ 今宵 踊りは 輪に輪ができる  
「ソウリヤ」思い 思いの だて姿

ヤレ あなたが 一人と 決めておいて  
「ソウリヤ」浮気は その日の 出来心

ヤレ 一に 手拍子 二に足拍子  
「ソウリヤ」三には はやし しゃしゃと頼む

ヤレ 娘 島田に チヨウチヨがとまる  
「ソウリヤ」共に 白髪の 生ゆるまで（生えるまで）

ヤレ 上手で 長い は また良けれど  
「ソウリヤ」下手で 長い は お庭のじやまよ

# てんがらこ

アーヨホーエーナーヨー

もろうた もろうた この子がもろうた

もろうた この子が 合わぬかもしれぬ

コリヤ 合わないとろわ ぐるりの衆じや

どうか 合わせて 頼みましよう

コリヤ わたしのやるのは たわごとでござる

村で 一番 百姓で二番

ハア 百姓なさる 人馬と云うて

前座よ 息子の 欣二と云うて

ハア 欣二 二十一 男の盛り

物も 良う書く 算ソロバンも

コリヤ 何にや付けて 抜からぬ欣二

欣二や ござおないぎが お梅と云うて

ハア お梅は 十六 花咲くつぼみ

物も 良う書く 算ソロバンも

縫い針 はたの道 かけても抜からぬ お梅

人には 愛嬌 便利の良さよ

ハア お梅の来る道 あぶら屋ござる

ハア あぶら屋の 息子が 富と云うて

ハア 富さ 十五 つぼみの花よ

物も 良う書く 算ソロバンも

コリヤ 何にな 付けて 抜からぬ富さ

ハア そこでな 欣二が 正月三日

ハア しゆうどの かたえと 年始に行くぞ

ハア そこでな お梅が 申するに

もうしや 欣さん いつもどる

早けりや 五日じや 遅けりや六日

ハア そこでじや 梅が 喜んで

ハア 踊る 横足で 富さを招く

ハア そこでな 富さも 喜んで

夜は 九つ 寝付きのころよ

ハア 裏のや 細戸に 忍び来て

ハア お梅や お梅と 格子戸叩く

ハア 高く 響きで 目を覚まし

ハア 誰かよ どなたか 屋号を名乗れ

ハア 屋号を 名乗るは 恥ずかしけれど

ハア 今日も 呼ばれた 富さでござる

何とや 富さん ようこそ来たぞ

コリヤ 裏のや 細戸に 連れに出る

ハア 幼い お手手に 肩にかけ

ハア 奥の 夜所所(やじようじよう)にや 連れ込んで

ハア 寝たれや 起きたり 道楽だらけ

ハア そこで お梅が お申するに

何とや 富さん 良いことか

ホや何にも 良いこと さらに無い

ほ欣二を 殺さにや 世間が狭い

欣二 殺せば 世間が広い

そこでな 欣二 帰りに 立ち聞きなされる

われら 二人は 二人のねずみ  
昨日や 今日まで 欣二が妻じゃ  
今宵 一夜は 富さの妻か  
二尺と八寸 ずらりと抜いて  
はやもな 欣二に 切りかかる  
一人 音頭は お庭の邪魔じゃ  
右の 先生に 頼みます  
一丁 二丁 てんがらこ

# 八百屋お七

所は本郷の、駒込で

アラサ コラサ(※緑り返し)

家は八百屋で、名は九兵衛

アラサ コラサ(※緑り返し)

一人娘の、お七とて

人のうらやむ、器量よし

いづぞや本郷の、大火事で

家はたちまち、焼きだされ

旦那寺をば、頼らんと

寺は駒込、吉祥寺

お七は寺へ、預けられ

しばらく寺に、いるうちに

寺の小姓の、吉三と

ままごと遊びを、するうちに

八百屋の家は、建直し

お七は連れて、帰られる

家に帰りた、お七には

いと恋しの、吉さんと

出べそ合わせの、事ばかり

女心の、浅はかさ

もう一度我が家を、焼いたなら

いと恋しい、吉さんに

逢いたい見たいの、一念で

一束のワラに、火をつけて

ばつと燃え立つ、火事の元

誰知るまいと、思いしに

隣の伝兵衛さんに、見つけられ

見つけられては、訴入され

訴入されては、奉行所へ

一段高い、お奉行所様

三尺下りて、かのお七

紅葉のような、手をついて

申し上げます、お奉行様

私の生まれは、ひのえうま

十四といえは、助かるに

十五と言った、ばつかりに

助かる命も、助からず

百日百夜は、牢の中

百夜がほのぼの、明けたなら

はだかの馬に、乗せられて

本郷の脇から、品川と

品川女廓衆の、言うことには

あれ見やしゃんせ、見やしゃんせ

あれが八百屋の、色娘

女の私が、惚れるのに

伝兵衛さんが、惚れるも無理はない

あわれお七の、物語り

あまり長いは、飽きがくる

次なる先生に、頼みます

# 安鎮清姫

ヨホホ

イナー もろた もろたよ

この子がもろうた

アラサ コラサ(※緑り返し)

もろた、この子は何にも知らぬ

アラサ コラサ(※緑り返し)

知らぬながらも、お話しようか

昔ながらの、段事でございます

芸州熊野の、安鎮さまよ

年に一度の、おほむね参り

行きし戻りし、駐茶が茶屋の

縁に腰掛け、すいつけ煙草

これがよ、こうじて、お酒まりなさる

そこでなババさんが、夕食支度

夕食給仕の、その時に

一人娘の、清姫を

安鎮女房に、しておくれ

安鎮女房に、してやるぞ

そこでな清姫、立ち聞きなさる

そこでな清姫、喜んで

すぐに清姫、衣裳替えなさる

夜は九つ、寝時の頃よ

安鎮部屋へと、忍び込み

もしや安鎮、こりや様よ

うれしき言葉を、聞かせておくれ

うれしき言葉を、聞かせてやるぞ

いつも変わらぬ、古手の話し

五条のや道とは、出家がござい

そこで清姫、腹をたて

私しや貴男の、女房でございます

そこでな安鎮、身の毛がよだつ

連れて帰れば、けんかの元じや

ついて来たなら、愠気が元じや

そこで安鎮、夜ぬけとなるぞ

もしや船頭さん、頼みがござる

わしには恋する、女が一人

これにや一つも、知らせぬように

これにや一つも、わからぬように

渡しおくれや、お願いまする

向こうに渡りて、道成が寺の

門にて和尚さん、頼みがござる

わしには恋する、女が一人

こりにや一つも、知らせぬように

これにや一つも、わからぬように

隠しておくれや、お願いまする

そこでな和尚さんが、釣り鐘おろし

鐘の中にと、安鎮かくす

こよりはるかに、仲ながむれば

はやもや清姫、舟場にかかり

渡せや渡せと、舟場をたたく

こより舟止め、女はのれん

渡すか渡さんか、この川ぐらい

女の身分で、渡りて見せる

差したるカンザシ、砂へと刺して  
着たる衣裳は、柳に着せて

見方川へと、どんぶり飛ぶと

浮きて沈みし、二・三度すれど

髪もやさかづく、うろこも生えて

火げん吹きたて、彼押しわけて

道を違わぬ、道成が寺の

門にかかりし、じつかと睨み

すけたる鐘をば、七巻き半じや

火げん吹きたて、尾ばたでたた

き

安鎮清姫、鐘もろともに

溶けて流れて、灰となるー

一丁 ねえさんテンガラコー

# 伊予の松山兄妹心中

兄の彰夫が、妹に惚れて

アラサ コラサ(※緑り返し)

恋し恋しが、病となりて

アラサ コラサ(※緑り返し)

してはならない、禁断の恋に

止めて止まらぬ、想いを明けて

一夜添いたい、妹よ恵美子

聞いた妹も、驚いて

これさ、兄さん何いわなさる

人が聞いたら、畜生といわる

親が聞いたら、勘当なさる

止めてください、これ兄さんよ

そこで妹は、思索のあげく

私にや好きを、虚無僧がござる

虚無僧殺して、下さるならば

一夜二夜は、三夜でも四夜も

一生添います、これ兄さんよ

聞いた兄さん、有頂天

虚無僧殺しに、気がはやり

ひときわ淋しい、夜の古寺で

虚無僧をそして、待ち構え

音なく来たりた、虚無僧めがけ

持った鎌にて、のどぶえ切れば

あつと一声、女の悲鳴

兄さん驚き、よくよく見れば

恋しかりし、妹でござる

兄さんその場で、自決をいたし

兄さ妹と、天国行きと

禁断の、恋の結末は

伊予の松山の、語り草

一丁、ねえさん、テンガラコー

# 鈴木門人

向こうの小山で 鹿が鳴く  
暑さが 辛ろうて 鳴く鹿か  
寒さが 辛ろうて 鳴く鹿か  
暑さも 寒さも 辛くはないが  
なな曾根 ななくば その下の  
五尺三寸 ひな男  
肩に鉄砲 手に火縄  
前に虎毛の 犬を連れ  
うしろに黒毛の 犬を連れ  
虎いけ 黒いけ 追いかける  
助けておくれよ 山の神  
助けてもろうた その礼に  
滝段 崩して 堂を建て  
堂のめぐりに 胡麻植えた  
春は花咲く 青山あたり  
鈴木門人と いう侍は  
女房もちにて 二人の子供  
二人子供の ある中で  
今日も明日もと 女郎買いはかり  
行けば同じく 新築町の  
紺ののれんに 桔梗のご紋  
見れば向こうに 白糸かけて  
見るに見兼ねた 女房のオヤス

なんぼ門人さん きこんじやとても  
十九や二十の 身じやあるまいし  
止めておくれよ 女郎買いはかり  
言えは門人は 腹たち顔で  
何をこしやくな 女房の意見  
俺の心に やまないものが  
女房ぐらいの 意見じややめん  
それが嫌なら その子を連れて  
そつちが出所まで 出て行きやが  
れよ